

公開資料

社会技術研究開発事業
スモールスタート研究開発実施終了報告書

「SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」

「シチズンサポートプロジェクトによる
社会的孤立・孤独の一次予防」

研究開発期間 2022 年（令和 4 年）10 月～2024 年（令和 6 年）3 月

伊藤 文人
東北大学 大学院教育学研究科 講師

目次

1. プロジェクトの達成目標	2
1-1. 研究開発課題の全体構想.....	2
1-2. スモールスタート期間に達成すべき事項.....	3
1-3. プロジェクトの研究・クエスチョン.....	4
1-4. ロジックモデル.....	5
2. 研究開発の実施内容	6
2-1. 研究開発実施体制の構成図.....	6
2-2. 実施項目・スモールスタート期間の研究開発の流れ.....	7
2-3. 実施内容.....	7
3. 研究開発結果・成果	9
3-1. スモールスタート期間全体としての成果.....	9
3-2. 実施項目毎の結果・成果の詳細.....	9
3-3. プロジェクトの研究・クエスチョンについて明らかになったこと.....	11
3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況.....	12
4. 研究開発の実施体制	14
4-1. 研究開発実施者.....	14
4-2. 研究開発の協力者・関与者.....	17
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	18
5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など.....	18
5-2. 論文発表.....	20
5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）.....	20
5-4. 新聞/TV 報道・投稿、受賞など.....	21
5-5. 特許出願.....	21
6. その他（任意）	21

1. プロジェクトの達成目標

1-1. 研究開発課題の全体構想

本プロジェクトで達成を目指す目標はシチズンサポートプロジェクトの実施（目標1）および可視化ツールの社会実装（目標2）である。研究開発要素①～③が有機的につながることで、これらの目標を達成することが可能となる（図1）。それぞれの目標の概要は以下のとおりである。

目標1：シチズンサポートプロジェクトの実施（研究開発要素①、③）

CSが高齢男性の低い社会参加率を改善するか、社会的孤立・孤独の一次予防システムとして有効に機能するか、健康面にも好影響を与えるか、フィールド調査および心理・脳・健康調査から検証する。スモールスタート期間から目標1'としてフィールド調査および心理・脳・健康調査を実施し、CSの効果検証の基礎となる知見を得る。

目標2：可視化ツールの社会実装（研究開発要素②、③）

このツールは目標2'としてスモールスタート期間から開発を開始する。社会実装に際しては、地域の作業療法士や保健師等の支援者が実施・評価のサポートを行うことを想定している。これにより、高リスクと判定された人が既存のサービスを受けているかどうか確認したり、評価結果に基づいて適切なサービスを提供することが容易になる。加えて、地域診断として、その地域の社会的ネットワークにどのような課題があるのかを把握し、ポピュレーションアプローチを検討するためにも活用可能である。

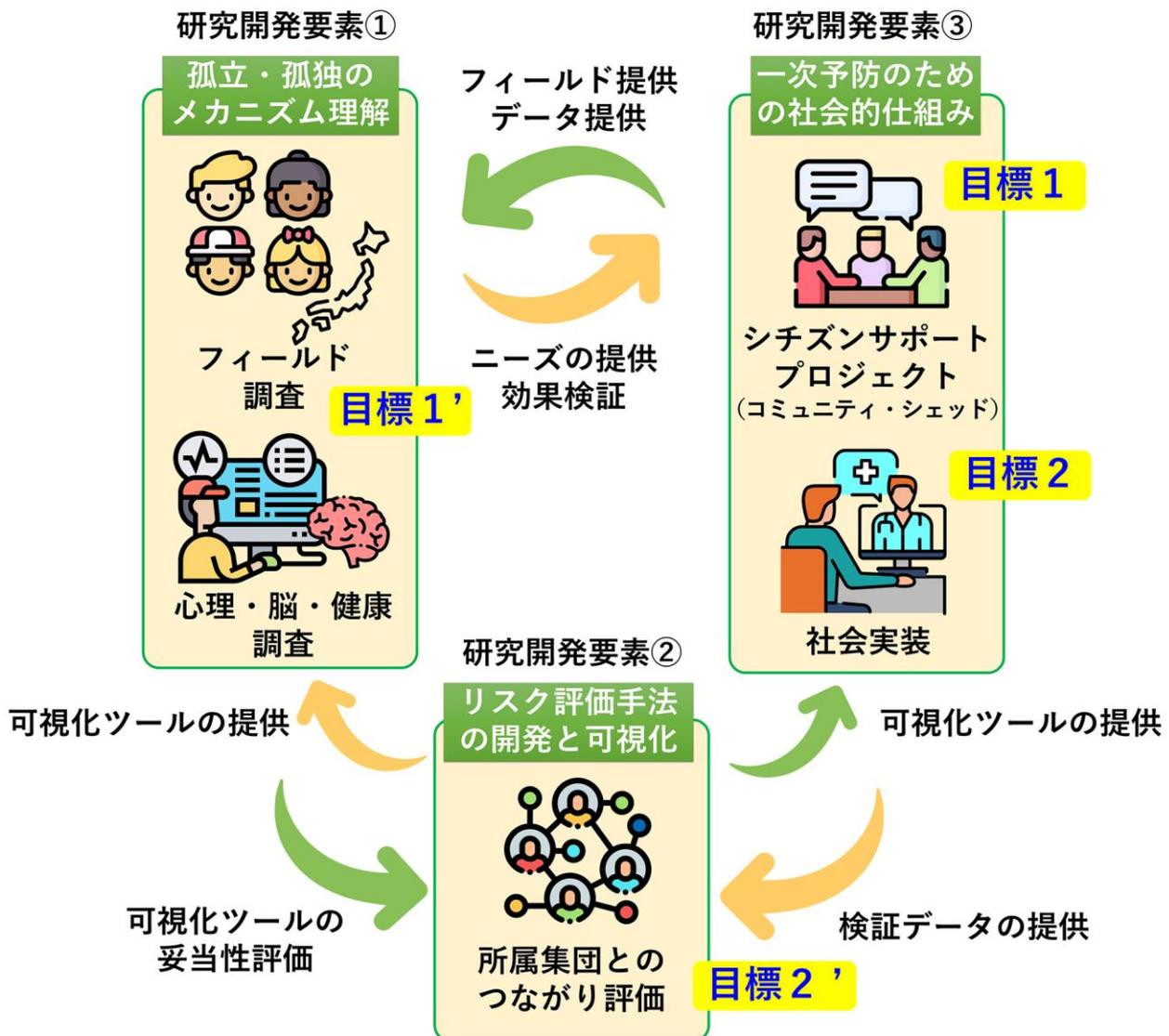


図1. 本プロジェクトの研究開発、PoC 実施の概要

1-2. スモールスタート期間に達成すべき事項

スモールスタート期間では、(1) 社会的孤立・孤独に関わる要因の特定やニーズ探索、地域住民の健康調査、(2) 国内外での高齢者コミュニティビジネス等の事例を研究し、CSを継続運営できる要素をリサーチ、(3) 水上村におけるCSの立ち上げを行う。

(1) 社会的孤立・孤独に関わる要因の特定およびニーズ探索については、フィールド調査と心理・脳・健康調査を使用した質的/量的混合アプローチを用いることで、当該地域において特に孤立・孤独に関わる要因や、どのようなCSが求められているかなどを明らかにする。また、CSが

孤立・孤独リスクや健康に対しどのような影響をもたらすか検証する上でのベースラインデータについても取得する。

(2) 「海外や日本での高齢者コミュニティビジネス等の既存の事例を研究し、CSを継続運営できる要素などをリサーチ」では、これまでの高齢者コミュニティ支援に関わる先行研究の調査に加えて、(1) イギリスやオーストラリアなどのCS先進国においてCSの継続運営のための仕組みや工夫について調査、国内の高齢者コミュニティ支援に関わるNPOなどの活動・経営に関する調査を行う。

(3) 2023年後半を目処に熊本県水上村においてCSの立ち上げを行う。事前に実施するニーズ調査に基づいてプログラム内容の選定を実施し、本格研究開発期間でのCS本格運営を目指す。

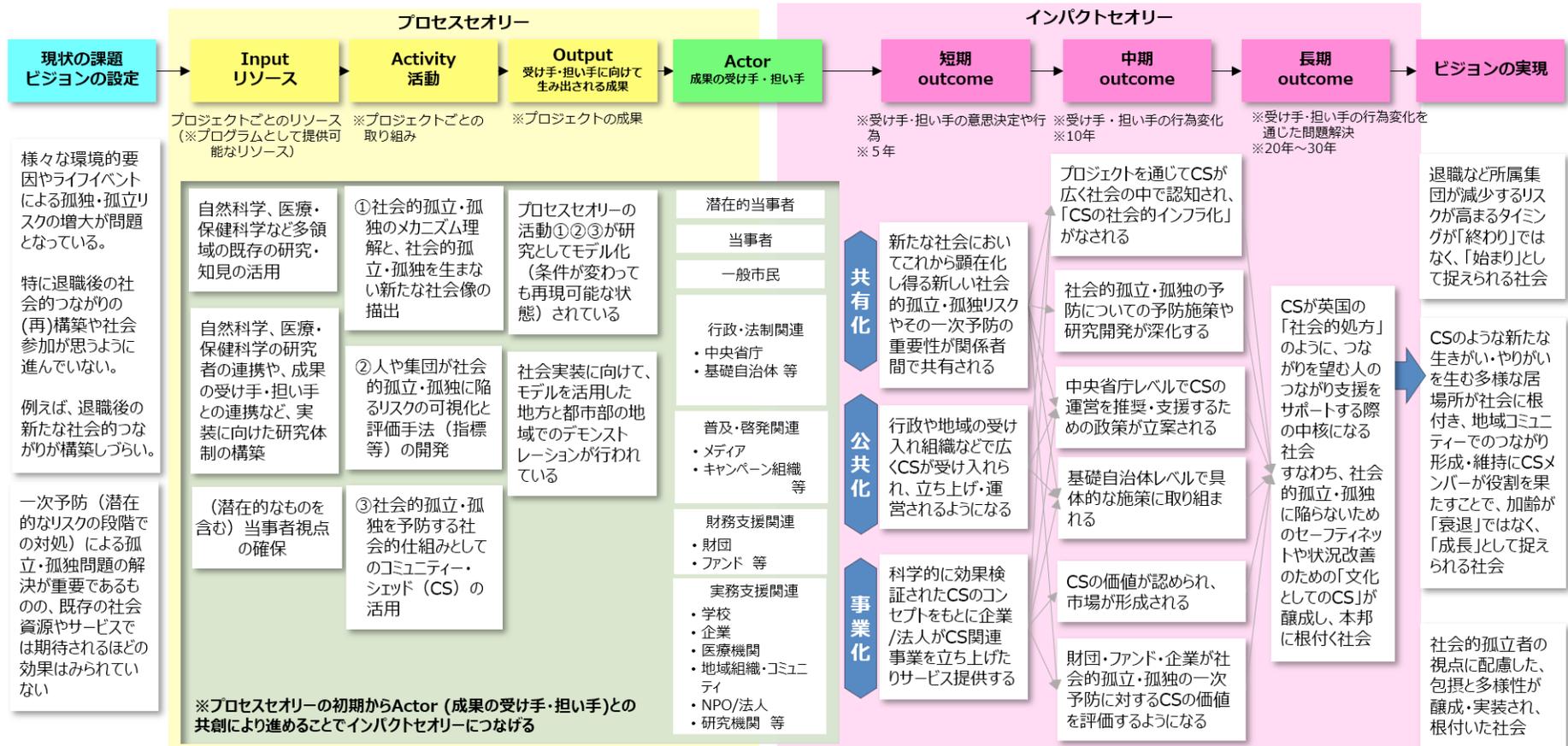
(1)～(3)は本格研究開発期間に実施するシチズンサポートプロジェクトの基礎をなすものである。

1-3. プロジェクトの研究・クエスチョン

- Q1. CSは社会的孤立・孤独の一次予防に有効であるか？
- Q2. 孤立リスク可視化ツールは有効に機能するか？
- Q3. CS実施地域における孤立・孤独の構造とは？

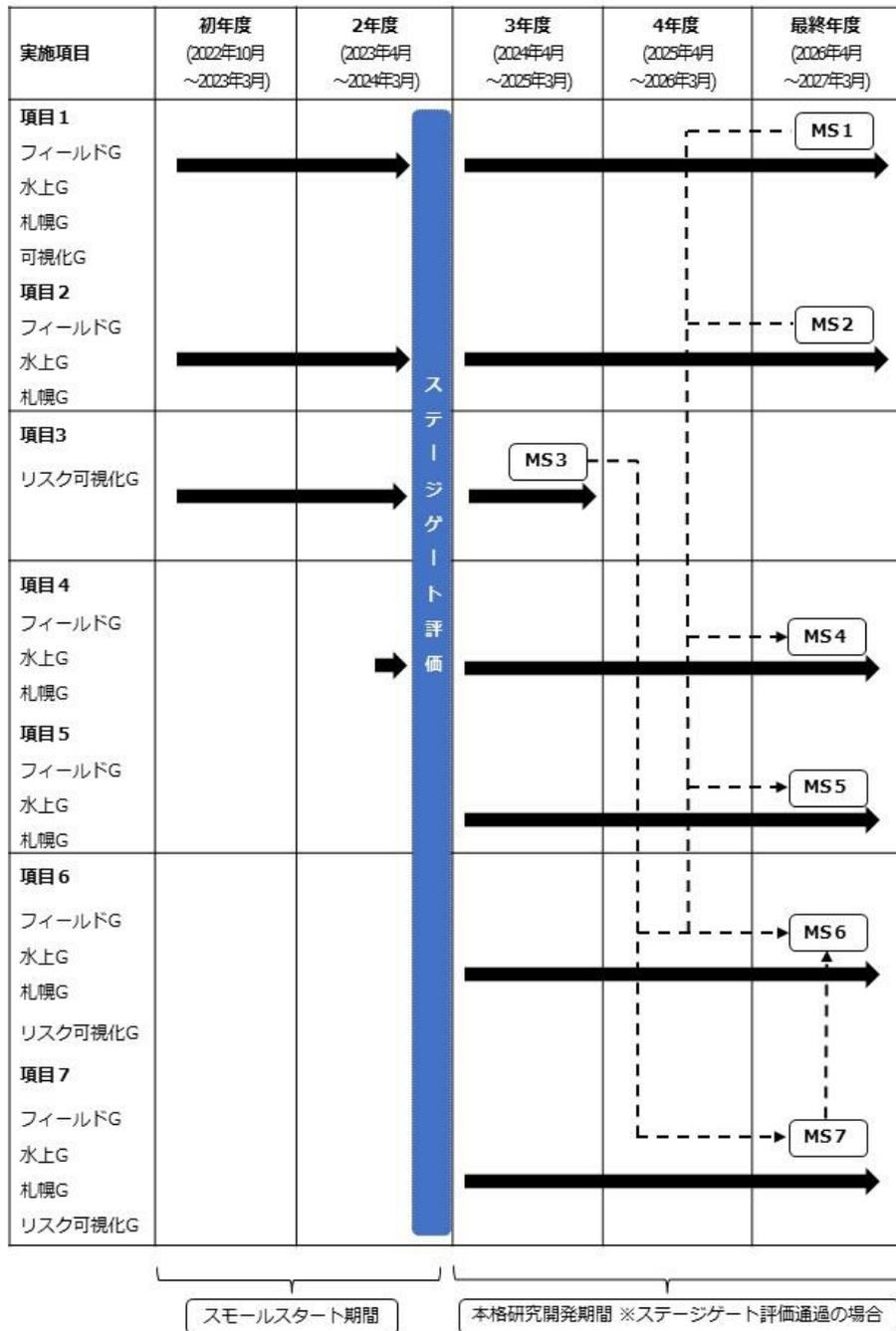
1-4. ロジックモデル

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）
「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」ロジックモデル



2. 研究開発の実施内容

2-1. 研究開発実施体制の構成図



マイルストーン (MS)

MS 1 : 質的/量的混合アプローチによるデータ取得

MS 2 : CSの継続運営に関わる要因の検討

MS 3 : 孤立リスク可視化ツールの開発

MS 4 : 水上村CSの立ち上げ・運営

-----ステージゲート評価-----

MS 5 : 札幌市CSの立ち上げ・運営

MS 6 : CSの効果検証

MS 7 : 孤立リスク可視化ツールの社会実装

2-2. 実施項目・スモールスタート期間の研究開発の流れ

実施項目 1：孤立・孤独のメカニズム解明および CS 効果検証のための質的/量的混合アプローチによるデータ取得

実施項目 2：CS の継続運営に関わる要因の検討

実施項目 3：孤立リスク可視化ツールの構築

実施項目 4：水上村 CS の立ち上げ

2-3. 実施内容

2-3-1. 実施項目 1：孤立・孤独のメカニズム解明および CS 効果検証のための質的/量的混合アプローチによるデータ取得

実施内容：高齢者を対象としたエスノグラフィーの手法を用いたインタビュー調査および参加観察（質的研究）、Web 調査に基づく心理学調査（量的研究）を開始した。エスノグラフィーの手法を用いたインタビュー調査および参加観察（質的研究）は、主たる実施者である高島を中心に実施した。水上村では 3～5 日のフィールドワークを計 3 回実施し、合計 29 名（高齢男性 19 名、支援者 6 名、村をよく知る情報提供者 4 名）に個別のインタビュー調査を実施した。水上村での質的データ収集は完了したため、さらに分析を進める予定である。また、CS 効果検証のための量的データ取得を 7 月から計 2 回実施し、70 名以上の高齢男性のデータを取得した。具体的には、歩行機能など健康面に関するデータ、認知機能や孤独感などの質問紙、oSIM のデータを取得した。2024 年 2 月頃から札幌市でも CS 効果検証のためのデータ取得を行っている。札幌では、50～80 歳代のシニア男性 41 名（65 歳未満；4 名、65～75 歳未満；18 名、75 歳以上；19 名）にインタビュー調査を実施した。今後、質的記述的にデータ分析を進めながら更なるデータ収集を継続する予定である。量的データについては、Web 調査に基づく心理学調査（oSIM など）を若年者 22 名に対して実施した。また、2023 年度に新たにいただいた予算を使用し、東北メディカルメガバンク機構の大規模 MRI データを活用した孤独・孤立のメカニズム調査の準備を開始した。報告書締切時点において、東北メディカルメガバンク機構の内部審査を正式に受けている段階である（東北大学川内南地区における「人を対象とする医学系研究」倫理審査委員会にて、受付番号 2023-006 として 2027 年 3 月 31 日まで承認を得ている）。

2-3-2. 実施項目 2：CS の継続運営に関わる要因の検討

【項目 1】オーストラリアメンズシェッド協会、イギリスメンズシェッド協会、アイルランドメンズシェッド協会、カナダメンズシェッド協会の 4 つの協会（イギリスとアイルランドは合同）が発行しているメンズシェッドの立ち上げ・運営に関するノウハウ集（ツールキットと呼ばれるもの）の情報を収集し、これらの情報を整理しつつオーストラリアのシェッド視察で得られた知見を新たに加えながら、日本語版のツールキットを作成した

(<https://www.ristex2022csjapan.com/%E7%AB%8B%E3%81%A1%E4%B8%8A%E3%81%92%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AE%E6%89%8B%E5%BC%95%E6%9B%B8-toolkit/>)。

【項目 2】世界各地にあるメンズシェッドが 1) どのような活動を、2) どの程度の頻度で、3) どのように収入を得ながら、実施しているかに関する情報を収集した。ソースはオーストラリアメンズシェッド協会、イギリスメンズシェッド協会、アイルランドメンズシェッド協会、カナダメンズシェッド協会等のホームページである。ただし、現時点ではネットから得られる情報のみとなっているため、実際に各シェッドに調査票の記入をしていただくオンライン調査を次年度に実施する予定である。

【項目 3】先行研究の調査を行うとともに、オーストラリアのメンズシェッドや日本のコミュニ

ティサービス（「一般社団法人えんがお」や「居場所ココカラ」など）を訪問し、CSを継続運営できる要素をリサーチした。

2-3-3. 実施項目3：孤立リスク可視化ツールの構築

2020年にオーストラリアの研究グループによって開発されたオンライン社会的アイデンティティマッピング（oSIM）をベースに、このツールの英語表記部分を日本語化するツール開発を行った。当初、オリジナル版（英語版）の日本語化を目指していたが、ソフトウェア会社が詳細な調査を行った結果、システムが多言語対応していないことがわかったため、2022年11月より五十嵐（主たる実施者・名古屋大）を中心に、英語表記を日本語化するChrome拡張の開発を実施している。日本人約300名を対象としたオンライン調査を実施し、oSIMの妥当性検証を実施した。現在論文投稿の準備をしている。

2-3-4. 実施項目4：水上村CSの立ち上げ

2023年後半からCSを実施するための準備として、村老人会への出席・事業説明を継続的に実施した。また、1月～3月には高齢者の集いの場への訪問を行い、草の根的に村民とのコミュニケーション、信頼関係の構築に努めている状況である。また、役場関係者との定期ミーティング（月1～2回）を継続し、CS立ち上げに向けた役割分担などを協議した。その成果として、熊本県水上村において、11月30日13:00に正式に水上CS@湯山地区「寄郎屋（よろうや）」が立ち上がることとなった。12月にはメディアなどの取材も行われた。

3. 研究開発結果・成果

3-1. スモールスタート期間全体としての成果

スモールスタート期間全体としては、予定していた CS 効果検証のためのデータ取得、社会つながり可視化ツールの開発、水上村 CS の立ち上げが実施でき、期待通りの成果が得られたと考えている。

3-2. 実施項目毎の結果・成果の詳細

3-2-1. 実施項目 1：孤立・孤独のメカニズム解明および CS 効果検証のための質的/量的混合アプローチによるデータ取得

社会的孤立・孤独メカニズム理解について、水上村での質的調査の暫定的な結果としては、高齢男性が“寂しさ”を感じる背景には、村外の人である“まちもん（町の者）”との避けられない交わりがあった。村内での仕事は限られており、村民であっても村外で働く者がどんどん増えていく現状があった。“まちもん”の新しい価値観の流入によって、自分たちが伝統的に重視してきた活動（例えば、神事）や人付き合いの仕方における価値観が軽視されていくことに、疎外感や寂しさを感じていた。村内での伝統的な活動の多くは“当番制”によって機能を維持していた。しかし、村全体の高齢化と新型コロナウイルス感染症の蔓延による活動の中断が、“当番制”の存続の危機を招いていた。当番の担い手が高齢化し、さらに担い手の数が減ることで一人当たりの負担が過度になる事例が増えていた。活動の中断が長期になるにつれて、活動を再開する意欲がそがれ、伝統的な活動への価値観がさらに薄れていくことで、永久的な廃止も生じていた。現状は既存の人とのつながりがうまく機能し、例えば障害や疾患によって交流が困難等の理由を除いては、孤立はほとんど生じていないと感じている者が多かった。その一方で、村の伝統的活動が長い間、副次的にもたらしていた人とのつながり維持（孤立予防）の機能が危機に瀕することで、今後、孤立が進行していく前段階の状況も観察された。水上村での質的データ収集は完了したため、さらに分析を進める予定である。

社会的孤立・孤独メカニズム理解について、札幌市での質的調査の暫定的な結果としては、会社を自己が第一に属する場とし、家庭や交友関係よりも会社を重んじるあり方が重視される時代を生き抜いてきた都市部会社員の価値観が色濃く表れていた。研究参加者からは、“企業戦士”や“会社人間”という語彙でその感覚が表現されていた。現役時代の人付き合いのほとんどが、会社関連のつながりで占有されていた。このつながりは縛りがある分、そのつながりを保つエフォートは小さく、孤立や孤独についてはほとんど考える必要がないようであった。しかし、それらのつながりは退職と同時に断絶することがほとんどであった。退職後には、ゆくて安全なつながり方の割合が増加する傾向にあった。いつ切れてもいつ乗り換えてもよいつながり方は、都市部の豊富な社会資源と他者に過度に干渉しない都市部文化によって許容されていた。このゆるいつながり方は、自由で心地よさがある反面、エフォートを割かなければ簡単に切れて孤立を招くリスクも含んでいた。後期高齢者を中心に、健康問題が生じると、もう一段階違った孤立や孤独のリスクを経験していた。退職後に新たに従事するようになった活動も、生活機能の低下で喪失することがあった。さらに、周囲の人も高齢化して健康問題が生じたり死亡したりすることで、意図せずに所属集団や社会活動の機会を失うこともあった。札幌市では、自営業者や非正規労働者等のデータも今後分析を進めながら、必要に応じてデータ収集を継続する予定である。

3-2-2. CS の継続運営に関わる要因の検討

【項目 1】 オーストラリアメンズシェッド協会、イギリスメンズシェッド協会、アイルランド

のコミュニティサービス（「一般社団法人えんがお」や「居場所ココカラ」など）を訪問し、CSを継続運営できる要素をリサーチした。メンブッシュド先進国であるオーストラリアやイギリスでは自治体が財政的な支援を幅広く行っていることが明らかになった。

3-2-3. 実施項目 3：孤立リスク可視化ツールの構築

2020年にオーストラリアの研究グループによって開発されたオンライン社会的アイデンティティマッピング（oSIM）をベースに、このツールの英語表記部分を日本語化するツール開発を行った。当初、オリジナル版（英語版）の日本語化を目指していたが、ソフトウェア会社が詳細な調査を行った結果、システムが多言語対応していないことがわかったため、2022年11月より五十嵐（主たる実施者・名古屋大）を中心に、英語表記を日本語化するChrome拡張の開発を実施している。oSIMの開発者であるUniversity of Queenslandの研究グループの承諾・協力も得ており、一般公開へ向けて準備を進めている。日本人約300名を対象としたオンライン調査を実施し、oSIMの妥当性検証を実施した。結果については、日本心理学会第87回大会の公募シンポジウムで発表済みである（伊藤、2023）。現在論文投稿の準備をしている（Ito et al., in prep）。

3-2-4. 実施項目 4：水上村CSの立ち上げ

CSを実施するための準備として、村老人会への出席・事業説明を継続的に実施した。また、1月～3月には高齢者の集いの場への訪問を行い、草の根的に村民とのコミュニケーション、信頼関係の構築に努めている。また、役場関係者との定期ミーティング（月1～2回）を継続し、CS立ち上げに向けた役割分担などを協議した。その成果として、熊本県水上村において、11月30日13:00に正式に水上CS@湯山地区「寄郎屋（よろうや）」が立ち上がった。12月以降には新聞やテレビなどのメディア取材も行われた。CSの拠点となる事務所や小屋は地元企業のJA球磨より格安で賃貸することができた。実施内容について、初期は会場の掃除・小屋の補修作業（DIY）、これらがある程度完了した段階で、12月より竹炭作り、竹炭を入れる袋作成、門松作り等を行っている。また、毎月1回のミーティング時に参加メンバーが主体的に活動内容を決定していく。水上村CSを継続可能な事業として確立するために収入を得る手段として「ふるさと納税」による行政からの補助を検討している。将来的には、水上村CSで作製した物や作品等を販売し収益を得られる仕組みを構築する。中でも、木工細工は中心的な活動の一つとして木製の会員証やコースターを作成していく。木工細工は木材の加工から電気式の焼印、仕上げ作業など参加者の能力に合った工程を選ぶことが可能であり、作業レベルを幅広くすることでCS参加への敷居を低く感じてもらえるよう努めている。さらに、活動内容を複数準備し参加者の嗜好に合わせた活動を選択できるよう準備している。なお、CSで使用する資材（木工用木材、竹、工具など）は参加メンバーによって村内で確保され、着実に運用開始に向けて準備を進めている。ただし、こうした収益確保を最優先とした活動をするのではなく、あくまでも自己主体感や自己効力感が高まるよう、村の男性が主体的に行いたいと思っている活動を中心に活動を展開していく予定である。また上記と並行して、水上村CS@岩野地区の立ち上げに向けて、岩野地区のコアメンバーの選定やCS実施場所を検討しているところである。

3-3. プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. CSは社会的孤立・孤独の一次予防に有効であるか？

回答

スモールスタート期間において、この効果検証のためのベースラインデータを取得し、本格研究において、本格的な効果検証を進めます。オーストラリアなど諸外国ではすでに効果が広く

認められており、全世界で 3,000 以上のシェッドが運営されていると言われていています。熊本県水上村や北海道札幌市においても、地域の高齢者から良い反応をいただいております、検証結果が出始めるのはまだ先ではありますが、CS は社会的孤立・孤独の一次予防に貢献しようと考えています。

Q2. 孤立リスク可視化ツールは有効に機能するか？

回答

論文執筆段階ではあるものの、300 名程度の方を対象にしたオンライン調査を行った結果、孤立リスク可視化ツールは日本人の孤立・孤独を有意に予測するという結果が得られています。今後、専門家による査読を経て、結果を公開したいと考えています。

Q3. CS 実施地域における孤立・孤独の構造とは？

回答

水上村での質的調査の結果から、村民であっても村外で働く者がどんどん増えており、そうした“まちもん”の新しい価値観の流入によって、自分たちが伝統的に重視してきた活動や人付き合いの仕方における価値観が軽視されていくことに、疎外感や寂しさを感じている高齢者がいることが明らかになりました。札幌市での質的調査の暫定的な結果からは、高齢男性の孤立の背景に、例えば障害や疾患によって交流が困難等の理由を除いては、身体の衰えやエイジズムのような社会的価値観による活動参加の減少が明らかとなりました。また、高齢男性の特性である自尊心の高さや、孤立していく状況に「これで良い」と自分なりの理由を見いだすことによる合理的対処も認められました。上記札幌市では更なる質的データ収集を継続する予定です。

3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

内閣府が実施している「地域における孤独・孤立対策に関する NPO 等の取組モデル調査」では、2023 年度から 2 件のメンズ・シェッドプロジェクトが採択されている。一つ目は特定非営利活動法人 かみああとの「日本版メンズ・シェッドの提供事業」、二つ目は特定非営利活動法人 しんしろドリーム荘の「空家再生型メンズ・シェッドとおやじ溝を融合させた孤独・孤立対策」である。これらはどちらも愛知県内（前者は瀬戸市、後者は新城市）で実施されるものである。これらの活動は本プロジェクトと全く独立に進んでおり、日本全体としてのメンズ・シェッドに対する注目度の高さを表している。これらのプロジェクトと本プロジェクトと決定的な違いは、我々のプロジェクトでは質的・量的混合アプローチによる効果検証を行う点である。利用者が経験的に「効果を感じる」だけでは政策的提言に結びつけることは困難であり、将来的にシェッドに対する国の支援体制を準備・拡充していくためには、科学的なエビデンスが欠かせない。この点で、本プロジェクトの存在意義は極めて重要であり、本格研究開発期間での実施項目がその根幹をなす。すなわち、本格研究開発期間において、質・量双方の側面から科学的なエビデンスが得られ、英語論文として世界に発表されることは極めて重要なプロセスとなる。世界的に見ても量的なエビデンスは限られており、本プロジェクトにより得られるデータは極めて重要なものとなる。

世界的にみると、すでに数千のシェッドが存在しオーストラリアやイギリスでは政府がシェッドを支援するためのスキームを用意している。量的なエビデンスがないなかでも政府が支援を惜しまないという事実は極めて重要なものである一方、文化的な差異（つまり欧米圏では効果があっても、日本で効果がないかもしれないという可能性）を否定できない。つまり、この点におい

ても、日本で新たにシェッドを立ち上げ、その効果を厳密に検証することが重要となる。ただし、すでに本プロジェクトと独立にシェッドが立ち上がろうとしている現状を踏まえると、日本においてもその効果は間違いないであろうと考えている。

今後取り組むべき課題の一つは、海外研究者との連携である。特にシェッド先進国であるオーストラリアやイギリスとの連携によって、シェッドの効果検証や、その成果に基づく継続や展開をしていくことが重要となる。こうした考えから、今年度は各国の社会心理学研究者を数多くメンバーとして新たに加え、2024年に計画している世界のシェッド調査で、質問紙の選定から参画していただくことを考えている。日本国内のシェッドの効果検証においても協力をしていただけることとなっている。また、別プロジェクトとして、各国のシェッドから得られた様々なデータを集約・共有し、国を超えた効果検証を可能にしていくことも検討している。海外とのデータ共有については、RISTEX 企画運営室や東北大学データシナジー創生機構、研究推進・支援機構 知の創出センターと打ち合わせを開始している。昨今、研究 DX やオープンサイエンスの流れが加速しており、東北大学の先行事例として本プロジェクトに注目していただいている状況である。

4. 研究開発の実施体制

4-1. 研究開発実施者

(1) 可視化グループ（リーダー氏名：伊藤文人）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
伊藤 文人	イトウ アヤヒト	東北大学	大学院教育学研究科	講師
五十嵐 祐	イガラシ タスク	名古屋大学	大学院教育発達科学研究科	准教授
日道 俊之	ヒミチ トシユキ	高知工科大学	経済・マネジメント学群	講師
河地 庸介	カワチ ヨウスケ	東北大学	大学院文学研究科	准教授
鈴木 真介	スズキ シンスケ	一橋大学	ソーシャル・データサイエンス学部	教授
出馬 圭世	イズマ ケイセ	高知工科大学	経済・マネジメント学群	教授
青木 隆太	アオキ リュウタ	東京都立大学	人文科学研究科	特任准教授
玉井 颯一	タマイ リュウイチ	テュービンゲン大学	Hector-Institut für Empirische Bildungsforschung	研究員
澤村 大輔	サワムラ ダイスケ	北海道大学	大学院保健科学研究院	教授
吉田 一生	ヨシダ カズキ	北海道大学	大学院保健科学研究院	講師
梶村 昇吾	カヅムラ ショウゴ	京都工芸繊維大学	情報工学・人間科学系	助教
Francesca Kilpatrick	フランチェスカ キルパトリック	University College London	Circular Economy and Resource Efficiency	Lecturer
Alex Haslam	アレックス ハスラム	University of Queensland	School of Psychology	Professor

Blake McMillan	ブレイク マクミラン	University of Queensland	School of Psychology	Industry Engagement Manager
麦倉 俊司	ムギクラ シュンジ	東北大学	東北メディカル・メガバンク機構画像統計学分野	教授
行場 絵里奈	ギョウバ エリナ	東北大学	大学院教育学研究科	技術補佐員
今田 貴大	イマダ ヒロタカ	Royal Holloway, University of London	Department of Psychology	Lecturer
Catherine Haslam	キャサリン ハスラム	University of Queensland	School of Psychology	Professor
Mhairi Bowe	マイリ ボウイ	Heriot-Watt University	Department of Psychology	Assistant Professor
Juliet Wakefield	ジュリエット ウェイクフィールド	Nottingham Trent University	Department of Psychology	Senior Lecturer
Blerina Kellezi	ブレリナ ケレジ	Nottingham Trent University	Department of Psychology	Associate Professor
Clifford Stevenson	クリフォード ステイベンソン	Nottingham Trent University	School of Health Sciences and Social Work	Professor
Niamh McNamara	ニアム マクナマラ	Nottingham Trent University	School of Health Sciences and Social Work	Associate Professor
森 菜緒子	モリ ナオコ	秋田大学	大学院医学系研究科	教授
豊島 彩	トヨシマ アヤ	島根大学	人間科学部	講師
杉浦 元亮	スギウラ モトアキ	東北大学	加齢医学研究所	教授
竹本 あゆみ	タケモト アユミ	東北大学	加齢医学研究所	助教
Raja Timilsina	ラジャ ティミルシナ	アジア開発銀行研究所	研究所	Consultant

(2) フィールド支援グループ（リーダー氏名：東 登志夫）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
東 登志夫	ヒガシ トシオ	長崎大学	生命医科学域（保健学系）	教授
森内 剛史	モリウチ タケフミ	長崎大学	生命医科学域（保健学系）	准教授
丸田 道雄	マルタ ミチオ	長崎大学	生命医科学域（保健学系）	助教

(3) 水上支援グループ（リーダー氏名：松尾 崇史）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
松尾 崇史	マツオ タカシ	熊本保健科学大学	保健科学部	准教授
爲近 岳夫	タメチカ タケオ	熊本保健科学大学	保健科学部	准教授
宮田 浩紀	ミヤタ ヒロノリ	熊本保健科学大学	保健科学部	講師
仙波 梨沙	センバ リサ	熊本保健科学大学	保健科学部	准教授

(4) 札幌グループ（リーダー氏名：高島 理沙）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
高島 理沙	タカシマ リサ	北海道大学	大学院保健科学研究院	講師
岡田 宏基	オカダ ヒロキ	北海道大学	大学院保健科学研究院	助教
佐伯 和子	サエキ カズコ	富山県立大学	看護学部	教授
坂上 真理	サカウエ マリ	札幌医科大学	保健医療学部	准教授
Kim Walder	キム ワルダー	Griffith University	School of Health Sciences and Social Work	Lecturer

宮島 真貴	ミヤジマ マキ	北海道大学	大学院保健科学 研究院	講師
松寄 由利	マツザキ ユリ	宝塚医療大学	和歌山保健医療 学部	助教
平山 理花	ヒラヤマ リカ	北海道大学	大学院保健科学 院	M1
西山 雅子	ニシヤマ マサコ	ここボラ		代表

4-2. 研究開発の協力者・関与者

氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	協力内容

5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) メンズ・シェッド立ち上げのための手引書

<https://www.ristex2022csjapan.com/%E7%AB%8B%E3%81%A1%E4%B8%8A%E3%81%92%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AE%E6%89%8B%E5%BC%95%E6%9B%B8-toolkit/>

(2) 一般公開シンポジウム

<https://www.ristex2022csjapan.com/%E6%B4%BB%E5%8B%95%E5%A0%B1%E5%91%8A-reports/>

(3) 一般向け講演会

高島理沙、令和5年度西区福まち活動者全体研修会、「社会的孤立・孤独の予防と地域活動の可能性～地域の居場所づくり・担い手不足の解消に向けて～」、札幌市、2023年12月4日

(4) SNSでの情報発信

(1) サイト名：国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター

(JST-RISTEX) SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築） 2022年度採択「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」紹介ホームページ

URL: <https://www.ristex2022csjapan.com/>

立ち上げ年月：2022年12月

(2) SNSアカウント：@ShedsJapan

URL: <https://x.com/ShedsJapan>

立ち上げ年月：2022年10月

(3) SNSアカウント：@jcsasheds

URL: <https://x.com/jcsasheds>

立ち上げ年月：2023年7月

5-1-1. 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント（シンポジウムなど）

年月日	名称	場所	概要・反響など	参加人数
2023/9/15-17	日本心理学会第87回大会公募シンポジウム「コミュニティー・シェッドを活用した高齢者の社会的孤立・孤独の一次予防—シチズンサポートプロジェクトにおける心理学・脳科学のあり方」	オンライン	RISTEX シチズンサポートプロジェクトの取り組みについてグループリーダーおよび主たる実施者の4名が講演を行った。	不明

2023/12/23	超高齢社会における加齢観の刷新による社会的孤立・孤独の一次予防	東北大学川内キャンパス&Zoomウェビナー	学術変革領域研究（A）「生涯学」との共同開催。はじめにシチズンサポートプロジェクトについて説明し、その後、生涯学で得られた知見を踏まえ、議論するイベントである。	約 80 名
------------	---------------------------------	-----------------------	--	--------

5-1-2. 研究開発の一環として実施したイベント（ワークショップなど）

年月日	名 称	場 所	概要・反響など	参加人数

5-1-3. 書籍、DVD など論文以外に発行したもの

- (1) 「日本のメンズ・シェッド」、伊藤文人・高島理沙・東登志夫・松尾崇史・森内剛史・丸田道雄、RISTEX シチズンサポートプロジェクト、2023 年 7 月

5-1-4. ウェブメディア開設・運営

- (1) サイト名：国立研究開発法人科学技術振興機構 社会技術研究開発センター
 (JST-RISTEX) SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築） 2022 年度採択「シチズンサポートプロジェクトによる社会的孤立・孤独の一次予防」紹介ホームページ
 URL: <https://www.ristex2022csjapan.com/>
 立ち上げ年月：2022 年 12 月
- (2) SNS アカウント：@ShedsJapan
 URL: <https://x.com/ShedsJapan>
 立ち上げ年月：2022 年 10 月
- (3) SNS アカウント：@jcsasheds
 URL: <https://x.com/jcsasheds>
 立ち上げ年月：2023 年 7 月

5-1-5. 学会以外（5-3. 参照）のシンポジウムなどでの招へい講演 など

- (1) 高島理沙（北海道大学）、令和 5 年度西区福まち活動者全体研修会、「社会的孤立・孤独の予防と地域活動の可能性～地域の居場所づくり・担い手不足の解消に向けて～」、札幌市、2023 年 12 月 4 日

5-2. 論文発表

5-2-1. 査読付き (1 件)

- (1) 五十嵐祐、孤独感と感情状態による日常記憶の想起内容の比較～J-LIWC2015 による検討～ 信学技報, vol. 123, no. 24, 2023, <https://ken.ieice.org/ken/paper/20230515ZCtT/>

5-2-2. 査読なし (0 件)

5-3. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

5-3-1. 招待講演 (国内会議 4 件、国際会議 2 件)

- (1) 発表者 (所属)、タイトル、学会名、場所、年月日
- (2) 五十嵐祐 (名古屋大学)、孤独の心理学、日本心理学会第 87 回大会、神戸、2023.9.15-9.17
- (3) 高島理沙 (北海道大学)、札幌コミュニティ・シエッド、日本心理学会第 87 回大会、神戸、2023.9.15-9.17
- (4) 松尾崇史 (熊本保健科学大学)、Community Shed 熊本県水上村の取り組み、日本心理学会第 87 回大会、神戸、2023.9.15-9.17
- (5) 伊藤文人 (東北大学)、Online Social Identity Mapping (oSIM) を活用した社会的つながりの可視化、日本心理学会第 87 回大会、神戸、2023.9.15-9.17
- (6) Ayahito Ito (Tohoku University)、Citizen Support Project for Preventing Social Isolation and Loneliness、EHESJ-JST Joint Workshop、東京、2023.10.18
- (7) Risa Takashima (Hokkaido University)、Citizens' Collaborative Research Project、EHESJ-JST Joint Workshop、東京、2023.10.18

5-3-2. 口頭発表 (国内会議 4 件、国際会議 0 件)

- (1) 平山理花 (北海道大学)、高島理沙 (北海道大学)、都市部で暮らす要支援高齢男性における孤立の構造—質的記述的研究、第 53 回北海道作業療法学会、恵庭市、2023 年 6 月 24 日
- (3) 平山理花 (北海道大学)、高島理沙 (北海道大学)、坂上真理 (札幌医科大学)、「企業戦士」の退職における作業的トランジションの葛藤経験—質的記述的研究、日本作業科学研究会第 26 回学術大会、大阪市、2023 年 10 月 8 日
- (4) 松寄由莉 (宝塚医療大学、北海道大学)、高島理沙 (北海道大学)、宮島真貴 (北海道大学)、岡田宏基 (北海道大学)、孤立と孤独感の乖離が生じている高齢者の臨床的特徴、第 57 回日本作業療法学会、宜野湾市、2023 年 11 月 10 日
- (5) 五十嵐祐 (名古屋大学)、孤独感と感情状態による日常記憶の想起内容の比較～J-LIWC2015 による検討～、HIP HCS HI-SIGCE、那覇市、2023 年 5 月 15 日

5-3-3. ポスター発表 (国内会議 2 件、国際会議 0 件)

- (1) 発表者 (所属)、タイトル、学会名、場所、年月日
- (2) Rika Hirayama (Hokkaido University)、Risa Takashima (Hokkaido University)、Mari Sakaue (Sapporo Medical University)、The Significance of “Loose and Safe Connections” Affecting Isolation and Loneliness in the Retirement Process、The 6th FHS International Conference、Sapporo、October 20, 2023

- (3) Yuri Matsuzaki (Hokkaido University), Risa Takashima (Hokkaido University), Hiroki Okada (Hokkaido University), Maki Miyajima (Hokkaido University), Social Activities Impacting Loneliness among Older Adults in Japan, The 6th FHS International Conference, Sapporo, October 20, 2023

5-4. 新聞/TV 報道・投稿、受賞など

5-4-1. 新聞/TV 報道・投稿

(1) NHK、2023 年 5 月 28 日、「長野 4 人殺害【28 日詳報】“『独りぼっち』に過剰に反応も”」、五十嵐祐（社会心理学の専門家としてコメント）

(3) 札幌市西区生活支援体制整備事業広報誌、2023 年 7 月 14 日、「きらりさん file no. 05 ここボラ 代表 西山雅子 さん」

5-4-2. 受賞

(1) 平山理花、高島理沙、坂上真理、日本作業科学研究会第 26 回学術大会最優秀演題賞、「企業戦士」の退職における作業的トランジションの葛藤経験一質的記述的研究、2023 年 10 月 8 日

5-4-3. その他

- (1) 該当なし

5-5. 特許出願

5-5-1. 国内出願（ 0 件）

5-5-2. 海外出願（ 0 件）

6. その他（任意）

2023 年 10 月伊藤がクィーンズランド大心理学部の客員研究員に。oSIM・CS 関連のプロジェクトでの連携をさらに加速させる予定。

2024 年 7 月頃に Nottingham Trent University で国際シンポジウムを開催予定。

2024 年 6 月に Nottingham Trent University の Stevenson Clifford 教授が東北大学を訪れ、ミニシンポジウムを開催する予定。